

信 行 要 文 ④

第十三回 法華講夏期講習会 第四期

（平成二十八年六月二十六日）

皆さん、おはようございます。

本年度第四期の法華講夏期講習会であります。

皆様方も御承知の通り、今、日本も、また世界も様々な形で動いております。末法という一つの時代のなかで、色々な現象が出ているのでありますが、このような時にこそ、私達一人ひとりが大聖人様の「立正安国」の御精神を体して正を立てる、つまり折伏していくことが大切であります。すなわち、邪義邪宗の害毒によって多くの人達が苦しんでいるわけでありますから、その邪義邪宗を破折し、もって大聖人様の正しい仏法きえに帰依せしめていくことが、極めて大事だと思ひます。

そうしたなか、宗門は平成三十三年までに法華講員八十万人体勢を構築しようという誓願を立てて、戦っているのであります。そこで特に大事なことは、やはり本年は本年、来年は来年と、一年ごとの成果をしっかりと挙げあげていく、折伏目標を完遂かんすいしていくということが一番大事だと思ひます。今年は休んで、来年やるというようなことは、全く敗北的な考えであります。

だから、今やるべきことは今、必ずやると決意し、それぞれの支部における本年度の折伏誓願は必ず達成する。そのようにして、きちんと御奉公に努めていっていただきたいと思ひ次第であります。

さて、先般の第三期におきまして、七番目の『御義口伝』の講義が途中で終わってしまったので、その次から始めるのもなんですから、本日は初めからもう一度お話をしていきたいと思ひます。

7 御義口伝

此の品ほんの題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱これ是なり。如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身いまなり。今日蓮等の類たぐいの意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那だんななり。されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり。寿量品の事じの三大事とは是なり。（御書一七六五〇九行目）

これは『御義口伝』の「寿量品二十七箇の大事」のなかの「第一 南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事」の一文であります。

御承知の通り、法華経は釈尊一代五十年の説法中、真実最勝最尊の教説にして三説さんせつ超過ちょうかの大法、随自意ずいじいの仏説、釈尊出世ほんがいの本懐として説かれたところの、諸経中王の経典であります。

この「三説超過」の「三説」というのは已今当いこんとうの三説のことであり、「已説」とは法華経以前の四十余年に説かれた諸経のことを、已すでに説いたという意味から、已説と言うのであります。また「今説」とは、無量義経を指します。そして「当説」は、当まさに説くということで涅槃経を指し、この三説に超過したところの経典が法華経なのです。ですから法華経を、三説超過の大法と言うのであります。

それから「随自意の仏説」と申しましたが、随自意と対照的なのが随他意ずいたいです。随自意は自意したがに随うことで、随他意は他意に随うという意味でありまして、例えば釈尊が五十年間、御説法をされました。そのうち、最後の八年間に随自意の教えが説かれたのです。

それ以前の四十二年間は随他意、つまり他の意志、相手の機根に随って様々に法が説かれたわけですから、それは本来、釈尊が説こうとした教えではないのです。

それに対して、随自意というのは釈尊が御自分の意志によって説かれたところの教えでありますから、随自意と随他意との違いは極めて大きいのであります。

このように法華経は、まさに三説超過の大法であり、随自意の仏説であり、かつ釈尊出世の本懐なのであります。

先程言ったように、釈尊は五十年間、説法をされました。そのうち、最初の四十二年間は随他意なのですが、これは随自意である法華経を説くために、調機調養じょうきじょうようと言って、衆生の機根ととのを調べようと四十二年間にわたり様々なお経を説いて、衆生の機根が調ったところで、最後の八年間に本懐とする法華経を説いたのです。言わば、釈尊は法華経を説くために様々な爾前の教えを説いたのであります。

よく譬たとえられますのは、家を建てる場合に足場が必要だけれども、家が建ってしまえば、足場は邪魔になってしまいます。お経の場合、足場は爾前経、家が法華経に当たりますから、家である法華経が頭れたあとは、足場である爾前経は邪魔になるので、これは取り払わなければならないということです。

釈尊は、

「正直捨方便」(法華経 一二四ぢ)

と、それまで説いてきた爾前権経の方便の教えは正直に捨てなさい、とおっしゃっているのであります。

また法華経は、まさしく釈尊出世の本懐として説かれた教えであることから、

「諸経中王」(同 五三五ぢ)

諸経のなかの王様の経典であるとも言われているのであります。

この法華経におきまして、本門の正宗分として説かれたのが、いわゆる一品二半です。つまり、法華経二十八品のうち、最初の序品から安樂行品第十四までの、前半の十四品

が迹門であり、そのあと後半の十四品を本門と言います。そして、そのそれぞれについて「序・正・流通」ということが言われているのです。

この序・正・流通というのは、「序」は序分、それから「正」は正宗分、そして「流通」は流通分のことです。お経を解釈する場合に、この三段に分けて分別をします。

序分というのは、お経を起す因縁を説く部分です。次の正宗分は本文のようなもので、お経の中心をなす本論に当たります。そして最後の流通分には、行き渡るという意味がありまして、お経の功德・利益を挙げ、それを後世に流通するために説かれるものであります。お経にはみんな、この序・正・流通の三段が具わっているのであります。

この序分と正宗分と流通分という三つの立て分けがあるなかで、寿量品はいずれに当たると言うか、様々なお経があるなかでも正宗分になるのであります。

大聖人様は『開目抄』に、

「一切経の中に此の寿量品ましまさずば、天に日月の無く、国に大王の無く、山河に珠の無く、人に神のなからんがごとくしてあるべき」（御書 五五三）

と仰せられております。また、同じ『開目抄』のなかで、

「寿量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ。不知恩の者なり」（同 五五四）

とおっしゃっております。すなわち、この法華経が一切経のなかにおいて最も勝れ、また釈尊出世の本懐たる所以は、結局、このお経のなかに寿量品が説かれているからであり、法華経の中心は寿量品であると仰せなのであります。

ですから『可延定業御書』には、

「法華経の一代の聖教に超過していみじきと申すは寿量品のゆへぞかし」（同 七六一）

と仰せられているのであります。

そこで、この寿量品について少し申し上げますと、遠くは見宝塔品の三箇の勅宣に
ちよくせん
応えたもので、三箇の勅宣とは、釈尊が大衆に対して滅後の弘教を三回にわたって勧め命じたことを言い、寿量品はこれに應える意義があります。

また、近くは涌出品において釈尊が、他方の国土より集まってきた菩薩達が滅後娑婆世界の弘通を願い出たのに対し、それを押し止めて、

「止みね、善男子。汝等が此の経を護持せんことを須いじ。所以は何ん。我が娑婆世界に、自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り。一一の菩薩に各六万恒河沙の眷属有り。是の諸人等、能く我が滅後に於て、護持し、読誦し、広く此の経を説かん」（法華経 四〇八）

と仰せられたのであります。つまり、地涌の菩薩達がおられるので、滅後の弘教を願い出てきた他方の菩薩達に対しては押し止め、上行菩薩を上首とする六万恒河沙の地涌の菩薩を大地の底から呼び出されて、地涌の菩薩に末法の弘通を任せるんだとおっしゃるのです。

この地涌の菩薩達は、みんな金色にして三十二相を具え、そして無量の光明を放って

いる、まことに威風堂々としたお姿でありました。

このことは『開目抄』にも、

「釈尊に第一の御弟子とをぼしき普賢・文殊等にもにるべくもなし。華嚴・方等・般若・法華經の宝塔品に來集せる大菩薩、大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、此の菩薩に對当すれば獼猴の群中に帝釈の來たり給ふがごとし」（御書 五五〇頁）

と仰せであります。要するに、この地涌の菩薩は威風堂々として金色に輝く、まことに立派なお姿であり、今までの様々な菩薩達、例えば直弟子である普賢とか文殊といった菩薩達とは比べものにならないほど立派な方々であった。それはあたかも「獼猴の群中に帝釈の來たり給ふがごとし」すなわち、猿の群れのなかに神々しき帝釈天が現れたようなものだ、とおっしゃっているのです。

この地涌の菩薩達を見た直弟子の弥勒菩薩は、いまだかつて見たことがない菩薩達の姿を見て、不思議に思い、疑念を抱くわけです。そして、一座の大衆を代表して、釈尊に「この立派な菩薩達は、いったい、どこから來たのですか」と尋ねたのです。それからさらに「いかなる因縁によって、このような菩薩達が出現したのですか」と、釈尊に尋ねたのであります。

釈尊は、この弥勒菩薩の疑問に對しまして、

「我今実語を説く 汝等一心に信ぜよ 我久遠より來 是等の衆を教化せり」（法華經 四二二頁）

と答えられました。つまり釈尊は、現れ出でた金色に莊嚴された地涌の菩薩達は、私が久遠の昔からずっと教化してきたのだ、とおっしゃったのです。

これは、仏様の寿命が長遠で昔からずっと続いていることを、ほぼ説き明かされており、これを「略開近顕遠」と言います。略とは「ほぼ」という意味で、ほぼ近きを開いて遠きを顕しているということです。

つまり、みんなは今まで、釈尊はインドに生まれて、十九歳の時に出家し、三十歳で成道、つまり悟りを開かれた始成正覺の仏様だと思っていたわけです。ところがそうではなくて、地涌の菩薩達を遠い昔から教化してきたとおっしゃったということは、釈尊御自身の仏様としての寿命も遠い昔から存したことを、ほぼ教えているのであります。

これを「動執生疑」と言い、始成正覺に執着している心を動揺させて、疑いを生ぜしめることを指します。

これに對して「斷疑生信」この疑いを断じて信を生ぜしめるために説かれたのが寿量品でありまして、先の涌出品の略開近顕遠に對して、寿量品では広開近顕遠が示され、仏様のお命が三世にわたることを顕されたのであります。

このことは、釈尊が寿量品のなかにおきまして、

「汝等諦かに聴け、如來の秘密神通の力を。一切世間の天、人、及び阿修羅、皆今の釈迦牟尼仏は、釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、

あのかた らさんみやくさんぼだい おも しか じつ このかた
阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり。然るに善男子、我実に成仏してより已来、
無量無辺百千万億那由他劫なり」(同 四二九㊦)

と説かれております。つまり釈尊は、釈迦族の王子として生まれた方でありながら、王子である身分を捨てて城を出て、菩提樹のもとで悟りを開かれた仏様だと、みんなが思っていた。言うなれば、今世に生まれて、今世で修行をして、今世で悟りを開かれた仏様だと思っていたのです。ところが、その始成正覚の思いを打ち破って、気の遠くなるような久遠の大昔に仏に成った、いわゆる久遠実成くおんじつじょうの仏であると、寿量品のなかで明かされたのであります。

この寿量品における久遠の開顕、広開近顕遠は、それまでの爾前権経における仏身に對する認識を「大虚妄なり」と否定をして、根本から変えるものであったのです。そういう意味で、この寿量品は、法華経の中心・肝要いっぽんの一品であるばかりではなく、釈尊一代五十年の説法の眼目なのであるとおっしゃっているのです。

さて、テキストに載せた御文に入りますと、初めに「此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱これ是なり」とあります。

この御文の前には、標題に、

「第一 南無妙法蓮華経如来寿量品第十六の事」(御書 一七六五㊦)

とありますように、この御文は法華経寿量品の題号を説き明かされている部分であります。

初めに「此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり」とあるのは、法華経本門寿量品は末法御出現の大聖人様のために説かれたことを明かされているからであります。

すなわち、釈尊は神力品におきまして上行菩薩に妙法蓮華経を付嘱されましたが、その付嘱の内容は、実はこの寿量品に説かれているのであります。つまり、寿量品において南無妙法蓮華経をお説きあそばされ、それを神力品において付嘱されたのであります。しかして、この妙法蓮華経は事の一念三千自受用無作三身じじゅうむさんじんでありまして、これをひとことと言うと、南無妙法蓮華経ということになるのです。

また「神力品の付嘱」というのは、釈尊が神力品において上行菩薩に対して行った四付嘱のことであります。その四付嘱しやうたんというのけつちやうは、称歎付嘱・結要付嘱・正勸付嘱しやうかん・しやつかん積勸付嘱の四つです。

『上行菩薩結要付嘱口伝』には、

「
結要勸持に四 ———— 初めに称歎付嘱 ———— 爾時に じぶつごう仏告より 猶不能尽まで
——— 二に結要付嘱 ———— 以要言之いようごんしより 宣示顕説まで
——— 三に正勸付嘱 ———— 是故汝等ぜ こによとうより 起塔供養まで
——— 四に積勸付嘱 ———— 所以者何しよいしやがより 而般涅槃にほつねはんまで」

(同 九四二㊦)

と記されております。

このように口でお話ししましても、なかなかお解りにならないことと思いますが、こ

の四付嘱の内容は天台大師の『法華文句』に準拠しておりまして、宗門から刊行している『妙法蓮華經並開結』を御覧いただくと、今、私の話していることがお解りになると思います。お帰りになりましたならば『法華經』の五一三ページを開いていただいて、下の段の訓読の右肩に小さな文字で書かれてある「称歎付嘱」などの書き込みを御覧いただきたいと思います。

この神力品の「四付嘱」につきまして、総本山第二十六世日寛上人は『依義判文抄』のなかに、

「称歎付嘱とは法体である本門の本尊の功德を称歎すること、結要付嘱とは本門の本尊を付嘱すること、正勸付嘱とは本門の題目を勸奨すること、釈勸付嘱とは本門の戒壇を勸奨することである」（六卷抄 一〇二〇取意）

と教示され、この四付嘱を「結要付嘱」と総称されております。

さて、このうちの「以要言之」以下の結要付嘱の文は「四句の要法」とも言われます。すなわち、

「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す」（法華經 五一三〇）

と説かれる四句の要法に法華經の枢要を結んで、末法弘通のために上行菩薩をはじめとする本化四菩薩に付嘱されたのであります。

『三大秘法抄』のなかには、

「問ふ、所説の要言の法とは何物ぞや。答ふ、夫釈尊初成道より、西味三教乃至法華經の広開三顯一の席を立ちて、略開近顯遠を説かせ給ひし涌出品まで秘せさせ給ひし処の、実相証得の当初修行し給ふ処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」（御書 一五九三）

と説かれておりまして、名字凡夫の仏様が久遠元初に修行し証得した妙法蓮華經を、末法出現の日蓮大聖人様が三大秘法として建立あそばされた、これが結要付嘱の正体であり、これを本尊付嘱とも言うのであります。

よって、日寛上人の『依義判文抄』には、

「本尊付嘱とは、即ち是れ如来の一切の名体宗用は、皆本門の本尊、妙法蓮華經の五字に於て宣示顯説する故に『皆於此經』等と云うなり。此の本尊を以て地涌千界に付嘱する故に『其の枢柄を撮って而して之れを授与す』と言う、豈本尊に非ずや」（六卷抄 一〇二〇）

と述べられております。御文のなかの「枢柄」とは、主要にして根本となるもの、という意味であり、すなわち法華經の肝心である南無妙法蓮華經を指すのです。ですから「其の枢柄を撮って而して之れを授与す」とは何かと言えば、本尊のことであるとおっしゃっているのであります。

また『三大秘法抄』のなかには、

「末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり。名体宗用教の五重玄の五字なり」（御書 一五九四頁）

と説かれておりますように、神力品の結要付嘱の正体は、結局、妙法蓮華經の五字なのです。この妙法蓮華經は、神力品において上行菩薩に付嘱された故に、既にその時、釈尊のものではなく、上行菩薩のものであったのであります。したがって、このことを『御義口伝』には、

「此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ず。既に此の品の時上行菩薩に付嘱し玉ふ故なり」（同 一七八三頁）

と、甚深の意をお述べあそばされております。

それでは、その上行菩薩とはどなたかと言えば、これは日蓮大聖人様の垂迹のお姿であり、その本地は久遠元初自受用報身如来であります。よって、この神力品の付嘱は、文底觀心の上から拝するならば、釈尊より御本仏日蓮大聖人様に妙法をお返しせられた儀式であるという非常に大事な意味があるのです。

したがって『觀心本尊抄』には、

「此の本門の肝心、南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊藥王等にも之を付嘱したまはず、何に況んや其の已外をや。但地涌千界を召して八品を説いて之を付嘱したまふ」（同 六五四頁）

と、甚深の意を仰せあそばされているのであります。

次に「如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり」とあります。

ここで「如来とは釈尊」とおっしゃっておりますが、如来とは真如より来たところの方を言います。つまり、一切存在の真実の姿で、しかも永遠不変の真理を真如と言い、如来とは、その永遠不変の真理より現れたところの者のことであります。すなわち、一切諸法の根本を悟り、三世の因果に通達した釈尊のことであり、総じては「十方三世の諸仏」つまり、すべての仏様のことで、別しては「本地無作の三身」であるとおっしゃっているのです。

この如来には「如来十号」と言いまして、十種の尊称があるのです。

一つは、今言った「如来」で、一切諸法の根本の真理を体現して、三世にわたる因果律を証得した方という意味です。

第二番は「応供」で、これは応受供養と言って、人天の御供養を受けるに足る者という意味です。

第三番が「正遍知」で、これは正等覚とも言いまして、一切の智を具えて、諸法を遍く正しく理解できる者との意であります。

第四番が「明行足」で、過去・現在・未来の三世に通達して、善行を修して満足する者ということです。

第五番が「善逝」で、これは善く逝くの意で、無量の智慧をもって迷いの世界をよく

超え出て、八正道を行じて仏の境地に達する者を言います。

第六番が「世間解^げ」で、これは因果の理法を悟って、世間・出世間のことをよく理解する者という意味です。

第七番が「無上士」で、衆生のなかで、この上もなく優れている者のことを言います。

第八番が「調御丈夫^{じょうごじょうぶ}」で、これは一切衆生を調伏^{じょうぶく}し、制御して成仏させる力を具えている者という意味であります。

第九番が「天人師」で、天と人の師匠という意味です。あらゆる天人を指導する師となれる者ということです。

第十番が「仏世尊」です。仏とは智や徳が円満で目覚めた者の意であり、世尊とは世の中のあらゆる人から尊敬される方のこと、という意味であります。

このように如来には十号があるのですけれども、また、この「釈尊」という語のなかにも、実は六種の意義が存しているのです。

すなわち、お経のなかには蔵・通・別・円の四教があるのですが、この四つの教えのそれぞれに、その教えを説く釈尊がいるのです。つまり、第一に蔵教の釈尊、第二に通教の釈尊、第三に別教の釈尊があるのです。

その次が円教の釈尊ということになりますが、この円教とは法華経のことで、その法華経は迹門と本門とに分かれているでしょう。その上から、第四に法華経迹門の釈尊、第五に法華経本門文上の釈尊があるのであり、さらに第六に法華経本門文底の釈尊という、六種の釈尊があるのです。

この第六の文底の釈尊とは、法華経本門寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華経を説かれる仏様ということです。この仏様こそ、まさに本有常住^{ほんぬ}の仏、久遠元初の自受用報身如来のことで、根本の仏であります。この御本仏が末法に出現せられて、本因下種の南無妙法蓮華経を顕されたのであり、それが宗祖日蓮大聖人様なのです。ですから、成仏の根本因を教示あそばす仏様であるから「本因妙の仏」と申し上げるのであります。

『百六箇抄』には、

「自受用身は本、上行日蓮は迹なり。我が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり。其の教主は某^{それがし}なり」(同 一六九五)

とありまして、法華経本門文底の釈尊は久遠元初の自受用報身如来であり、それは末法の御本仏である宗祖日蓮大聖人様のことを指すのであります。

しこうして、この「如来とは釈尊、総じては十万三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり」との仰せは、如来について総別の二義があることを御教示されているのです。

御文のなかの「十方三世の諸仏」は、まさに十方三世にわたって存在する、無量無数のあらゆる仏様のことであります。「十方」というのは、四方・四維に天地を合わせた十で、空間の全体を表します。そして「三世」というのは過去・現在・未来のことで、時間の全体を表しています。したがって、空間・時間をすべて網羅した、あらゆる仏様

という意味であります。

次に、別しての「本地無作の三身」とは、久遠元初の自受用報身如来のことでありまして、すなわち末法に御出現あそばされた大聖人様のことを本地無作の三身とおっしゃっているのであります。

この「本地」とは久遠元初を言いまして、「無作」とは有作に対する語で、つくろわず、もとのまま、という意味があります。つまり、爾前迹門の仏様方は色相莊嚴と言いまして、金色三十二相・八十種好という身を飾った、我々凡夫とは異なる身体の特徴を持っていたのです。しかし末法の仏様、つまり久遠元初の仏様は示同凡夫、私どもと変わらないお姿をなさっているのであります。凡夫即極の本仏は、色相莊嚴の金色に輝く姿ではなく、私達と同じような無作の形であるので、無作三身如来とも言うのであります。

総本山第二十六世日寛上人は『撰時抄愚記』におきまして、

「文底の意は即ち本地無作の三身を顕わすなり。此の仏は凡夫の当体本有の俣なり。即ち是れ本因妙の教主なり。此の仏の名号を『南無妙法蓮華經』と云うなり。彼の十方世界の一切衆生、文底無作の三身を信ぜば、豈『南無妙法蓮華經』と唱えざるべけんや。今此の意を以て末法に例するなり。故に知んぬ、末法下種の教主日蓮大聖人は即ち是れ本地無作の三身・南無妙法蓮華仏なり」（御書文段 三〇六段）

と仰せられて、久遠元初の仏様は我々凡夫と少しも変わらないお姿をなさっているのだとおっしゃるとともに、末法御出現の宗祖日蓮大聖人様こそ、本因妙の教主にして御本仏であられるのだと、解りやすく御指南あそばされているのであります。

今言ったように、本因妙の教主とは久遠元初の自受用報身如来、つまり大聖人様のことでありますが、それに対して本果妙の教主は久遠実成の釈尊を言うのであります。ですから、本因妙の仏というのは、本果妙の仏様である釈尊に対する言葉でもあるわけです。

このことについては『百六箇抄』のなかに、

「本因妙の教主本門の大師日蓮」（御書 一六八五段）

と、大聖人様こそ本因妙の教主であると明言あそばされております。

また、日寛上人のお書きになられた『文底秘沈抄』には、

「釈尊は乃ち是れ熟脱の教主なり、蓮祖は即ち是れ下種の教主なり、故に本因妙の教主と名づくるなり」（六卷抄 五二段）

と、甚深の意を我々にお示しあそばされています。

しからば、その下種の教主とは何かと言うと、『本因妙抄』のなかに、

「仏は熟脱の教主、某は下種の法主なり」（御書 一六八〇段）

と示され、三大秘法の南無妙法蓮華經を説かれて衆生を救済する下種本因妙の仏様、末法の御本仏は日蓮大聖人様であると明らかにされているのであります。

次に「今日蓮等の類の意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那なり」とありますが、「日蓮等の類の意」すなわち、日蓮大聖人様およびその門下

の意で如来を論ずるならば、総じては一切衆生はことごとく如来であり、別しては日蓮大聖人様およびその弟子檀那のことである、とおっしゃっております。

この本地無作の三身については、^{りょうじゅう}両重の総別が存します。日寛上人は『法華取要抄文段』に、

「今此の義に於て両重の総別あり。一には総じてなを論ずれば一切衆生なり。別して之を言わば蓮祖の末弟なり。二には総じて之を言わば蓮祖の末弟、別して之を論ずれば^{ただ}但是れ蓮祖大聖人のみ^{くきょう}真實究竟の本地無作の三身なり」（御書文段 五一四^〆）

と、両重の立て分けがあると仰せになっているのです。

つまり本地無作の三身とは、一には、総じてこれを論ずれば一切衆生も無作の三身なのだと言っています。そして別して言えば、日蓮大聖人様の末弟、すなわち大聖人様の御法をしっかりと信ずる我々のことです。

二には、総じてこれを言えば日蓮大聖人様の末弟であり、別して言えば、ただ日蓮大聖人様のみが真實究竟の本地無作の三身であるとおっしゃっているわけであります。つまり、総じて言えは我々も本地無作の三身である。しかし、別して言えば大聖人様御一人に限るのであります。

この総別を混乱してしまい、「それなら、私も偉いんだな」などと思っただめです。そうではないのです。我々は、信心がなければそこに到達できないのであり、大聖人様と我々との違いは歴然としているのでありますから、天狗になってはだめです。やはり、信心というのは、^{しんし}眞摯に正しく御本尊を拜していく姿勢がなければならぬのであります。

次に「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり。寿量品の事の三大事とは是なり」と仰せであります。

「法華經の行者」というのは、これは文字通り、法華經の教説に従って修行する者のことです。末法^{こんじ}今時では、総じて言えば三大秘法の南無妙法蓮華經を受持信行し、実践する者を法華經の行者と言います。つまり、我々もみんな法華經の行者なのです。しかし『撰時抄』に、

「日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし」（御書 八六四^〆）

と、大聖人様がおっしゃっていますように、ここにも総別の二義があるのです。つまり、総じては我々も法華經の行者ではあるけれども、別して言えば大聖人様のことなのであります。ですから「末法の法華經の行者」とは大聖人様の^{いみょう}異名であり、その宝号を南無妙法蓮華經と言うのであるとおっしゃっているのです。

このことにつきましては『下山御消息』に、

「教主釈尊より大事なる行者を、法華經の第五の卷を以て日蓮が^{こうべ}頭を打ち、十卷共に引き散らして^{さんざん}散々に踏みたりし大禍は、現当二世にのがれがたくこそ候はんずらめ」（同 一一五九^〆）

と示され、大聖人様は、まさに「教主釈尊より大事なる行者」とおっしゃっております。

釈尊よりも大事な行者であるというのは、つまり大聖人様が御本仏であるからです。

しかして「寿量品の事の三大事とは是なり」とおっしゃっておりますけれども、そもそも「寿量品の事の三大事」とは、法華経本門寿量品の文底に秘沈されている本門の本尊と本門の戒壇と本門の題目の三大秘法のことです。そして、その中心は本門の本尊であります。

釈尊は、寿量品において久遠実成の仏身を明かし、出世の本懐とされました。それに対して、大聖人様は寿量品の文底に秘沈せられた事の一念三千の法門を説き顕され、その当体として三大秘法の大御本尊を御建立あそばされたのであります。

したがって『三大秘法抄』に、

「法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給ひて候は、此の三大秘法を含めたる経にて渡らせ給へばなり。秘すべし秘すべし」(同 一五九五)

と述べられております。また『四条金吾殿御返事』には、

「本門寿量品の三大事」(同 五九七)

と説かれ、さらにまた、この『御義口伝』において「されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華経と云ふなり。寿量品の事の三大事とは是なり」とおっしゃっているのであります。ですから、この「末法の法華経の行者」が御本仏の異名であることは明らかであります。

さらに『義浄房御書』には、

「寿量品の事の一念三千の三大秘法」(同 六六九)

と明かされるように、「寿量品の事の三大事」というのは、まさに三大秘法の御本尊なのです。

この御本尊には、人法一箇の御本尊と言うように、人と法の二つの立て分けがあります。人の本尊とは、この『御義口伝』のなかに「無作の三身とは末法の法華経の行者なり」と言われるように、大聖人様を指します。そして、法本尊は「無作三身の宝号を南無妙法蓮華経と云ふなり」とあるように、末法の御本仏大聖人様が御図顕せられた南無妙法蓮華経の大漫荼羅御本尊のことであり、ここに人法の立て分けがしっかりとあるのであります。

ですから、身延派やそのほかの日蓮宗のように、大聖人はあくまでも大菩薩であるというような間違った考えでおりますと、正しい本尊の意味が全く解らなくなってしまうのです。つまり、彼らの考えは釈尊本仏に固執しており、どうしてもそこから抜け出せないのです。しかし、大聖人様の御指南、特に『御義口伝』などをしっかりと拝していくと、大聖人様が末法の法華経の行者にして末法の御本仏であることが明瞭に解るのであります。我々は、しっかりとこのことを心得ていく必要があると思います。

次に八番目の『御義口伝』の御文を拝したいと思います。

8 御義口伝

建立御本尊等の事 御義口伝に云はく、此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり。戒定慧の三学、寿量品の事の三大秘法是なり。日蓮髓かに靈山に於て面授口決せしなり。本尊とは法華經の行者の一身の当体なり云云。(御書 一七七三(三)二行目)

この御文は『御義口伝』の「寿量品二十七箇の大事」のなかの「第廿五 建立御本尊等の事」の一文であります。

先程も申し上げましたけれども、法華經は釈尊一代五十年の説法中、真実最勝最尊の教えであります。三説超過の随自意の教えであり、釈尊出世の本懐として説かれた諸經中王のお経であります。そのなかで、寿量品は法華經本門の正宗分でありまして、開近顕遠、すなわち釈尊が久遠の仏であることが明かされている、最も重要な一品であります。

すなわち、釈尊は五百塵点劫の昔に菩薩道を行じて仏と成り、それ以後、常に娑婆世界に在って種々に法を説き、衆生を教化してきましたが、その間、燃灯仏として現れ、また入滅するなどと説かれてはきましたけれども、これらはすべて方便として説かれたものであって、実には滅度することなく、滅度したというのも方便に過ぎず、久遠常住であることを明かされているのであります。

この久遠実成を明かした寿量品は、法華經の中心であるとともに、釈尊の一代説教の眼目であります。久遠の開顕は、迹門におきましては単に可能性として示されましたけれども、本門に至って久遠五百塵点劫の成道が明かされたのであります。しかし、釈尊が五百塵点劫の昔に仏果を成じたという結果、つまり本果は明かされましたが、何により、どのようにして、という原因、これを本因と言いますが、この本因については、

「我本菩薩の道を行じて云云」(法華經 四三三(三))

としか説かれていないのであります。

この成道の原因、すなわち本因である成仏の種子の法を説いたのが、まさに久遠の本仏でありまして、それは地涌の菩薩の上首・上行の再誕として末法に御出現あそばされた大聖人様のことです。

この立て分けがなかなか、ほかの宗派ではできないのです。このことをしっかりと我々は認識して、御書を拝していく必要があると思います。ですから、大聖人様は末法の御本仏であるということを、まず頭のなかにきちんとインプットして、そこから御書を拝読していきますと、ことごとく解ってくるのです。身延流に、つまり釈尊本仏のような考えで御書を読んでいきますと、途中で「どうも変だな」ということになってしまうのです。だからまず、大聖人様は末法の御本仏であるということをきちんと頭のなかに入れて、御書を拝読していくことが一番大事ではないかと思えます。

それでは本文に入ります。

初めに「此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり」とあります。

「依文」とは、読んで字の如く、依りどころとなる文証のことです。すなわち、寿量品に建立するところの御本尊の依文とは何かと言うと、まさに「如来秘密神通之力」の文であるとおっしゃっているのです。

「如来秘密神通之力」というのは、これは寿量品の仏の境界を説示した御文でありまして、「如来秘密」は体の三身の意であり、「神通之力」は用の三身の意であります。この体とは本体のこと、用とは「はたらき」のことです。

この「秘密」につきましては、天台大師が『法華文句』のなかで、

「秘密とは、一身即三身なるを名づけて秘と為し、三身即一身なるを名づけて密と為す。又昔説かざる所を名づけて秘と為し、唯仏のみ自ら知りたもうを名づけて密と為す」(学林版文句会本下 二七八)

と解釈あそばされております。

つまり、爾前権経では三身がばらばらに説かれ、各々、法身仏あるいは報身仏、あるいは応身仏の三身は立てておりますけれども、この一身に三身が具備するということは説かれていなかったのです。さらに、経によっては法身のみ、あるいは応身のみを説くというように、法報応の三身が整足して説かれることがなかったのです。しかし、この法華経に來たって爾前各別の三身が整足され、一身即三身・三身即一身の義が明らかにされたのであります。

天台大師はこの「秘密」について、寿量品の仏は法報応三身に各々三身を具した、俱体俱用の仏、つまり体も用も俱に具わっている仏様であって、ただ仏のみ知るところである故に「秘密」と言うのであると説かれております。

また「神通之力」につきましては、

「神通之力とは三身の用なり。神は是れ天然不動の理、即ち法性身なり。通は是れ無壅不思議の慧、即ち報身なり。力は是れ幹用自在、即ち応身なり」(同)

と説かれておりまして、神通之力とは、寿量品の仏様に具わる法報応三身それぞれの用きを顕されたものであるとおっしゃっております。

大聖人様は『諸法実相抄』のなかで、

「釈迦・多宝の二仏と云ふも用の仏なり。妙法蓮華経こそ本仏にては御坐し候へ。経に云はく『如来秘密神通之力』是なり。如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」(御書 六六五)

と、妙法蓮華経こそ体の仏、すなわち本仏であって、釈迦・多宝の二仏は用の仏、すなわち垂迹の仏であるとおっしゃっているのです。

文上の立場では、法華経の寿量品に明かされた五百塵点劫成道の仏が本仏であって、それ以降に現れた様々な仏は垂迹だと言っておりますが、文底観心の上から拝するならば、久遠元初の自受用身が本仏でありますから、これに対すれば、五百塵点劫成道の仏様も結局、垂迹の仏になってしまうのです。

そして『御義口伝』に、

「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり」(同 一七六五〇)

と述べられておりますように、つまり南無妙法蓮華經とは末法の法華經の行者にして無作三身如来の宝号であり、人に即して法、法に即して人、すなわち人法体一であるということを示されているのでありますから、「妙法蓮華經こそ本仏」とは日蓮大聖人様のことを指しているのであります。

大聖人様は末法に凡夫として、いわゆる示同凡夫のお姿で出現されましたけれども、この凡夫のままの日蓮が、実は久遠の本仏であるということを顕しているのであります。したがって、妙法を受持する末法出現の大聖人様御自身が本仏であるが故に、また大聖人様の教えを信じて題目を受持信行する者も必ず仏の当体となることができる、また我々は南無妙法蓮華經と唱えることによって成仏の大功德を獲得することができるという意が、ここに存しているのです。

ここに、仏が用の三身であるのに対して「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし」と、きちんとしたけじめがつけられているのです。つまり、久遠元初人法一箇の妙法蓮華經を御所持あそばす凡夫即極の大聖人様が「如来秘密」つまり、体の三身にして本仏であって、その当体より、釈迦・多宝の二仏をはじめ三世十方の諸仏も「神通之力」すなわち、用の三身、垂迹の仏として現、れることを示されているのであります。

しかして、この「如来秘密」は体の三身、「神通之力」は用の三身でありまして、もう一つ深く文底の上から言うならば、共に大聖人様の一身および心具の十界三千でありまして、大御本尊それ自体なのであります。故に『三大秘法抄』には、

「寿量品に建立する所の本尊は、五百塵点そのかみの当初このかたより以来、此土有縁深厚・本有無作三身の教主これ積尊是なり。寿量品に云はく『如来秘密神通之力』等云云」(同 一五九四〇)

とおっしゃっておられるのであり、ここに甚深の意が含まれていることを御認識いただきたいと思えます。

時間が来ましたので、本日の講義はここまでといたします。

今も申し上げましたけれども、大聖人様が末法の御本仏であるということ、まず我々が頭のなかにしっかりと植えつけていくことが大事です。そして、その上から御書を読んでいくと、御書の意味がよく解るのです。また、御書をしっかりと拝した上で法華經を読んでみると、法華經の意味がよく解るのです。さらに、その上から一代諸經を読んでいくと、本当に一目瞭然になるのです。だから、根本のところをしっかりと認識することが大事であります。

一代諸經のほうからだんだんと中心のほうへ入っていこうとしても、それで本当のところ解るような頭のいい人はいませんから、私達はまず信心をもって、大聖人様は末

法の御本仏ということをしつかりと頭に入れ、その功德を説いていく、この御本尊のすばらしさを一人でも多くの人に説いていくことが大切です。

よく「自折^じ折^{しゃく}他^{しゃくた}」と言いますように、他の人を折伏することは、また自分自身を折伏していることになるのです。ですから、これは非常に大事な修行なのです。信心から折伏を取ってしまったら、我々の一生成仏の修行にはなりません。仏道修行というのは、まさしく折伏なのです。

折伏をするのは、大聖人様の御遺命である一天広布を目指す、その仏道修行ですから、その大聖人様の御遺命をないがしろにしてしまっただけでは、いくら信心をしても、全く意味のないことになってしまいます。やはり、大聖人様の御遺命である広宣流布を目指した信心でなければ、本当の信心とは言えないのです。

広宣流布を目指す信心とは何かと言え、我々にとっては折伏でしょう。だから、
「自行化他^{わた}に亘りて南無妙法蓮華経なり」(同 一五九五)とありますように、自行と化他行を努めていくところに、我々の真の即身成仏があるということをしつかりと認識し、これからも頑張っていたきたいと思います。

本日は御清聴、まことに有り難うございました。